

大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン





大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン

1. はじめに
2. 「大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン」及び「大谷・小鹿地区まちづくり検討会議」の位置付け
3. 目指すべきまちの姿とまちづくり方針
4. 成長の道筋
5. 推進体制
6. まちづくりの取組目標
7. 参考資料（大谷・小鹿周辺地区の特性、課題）

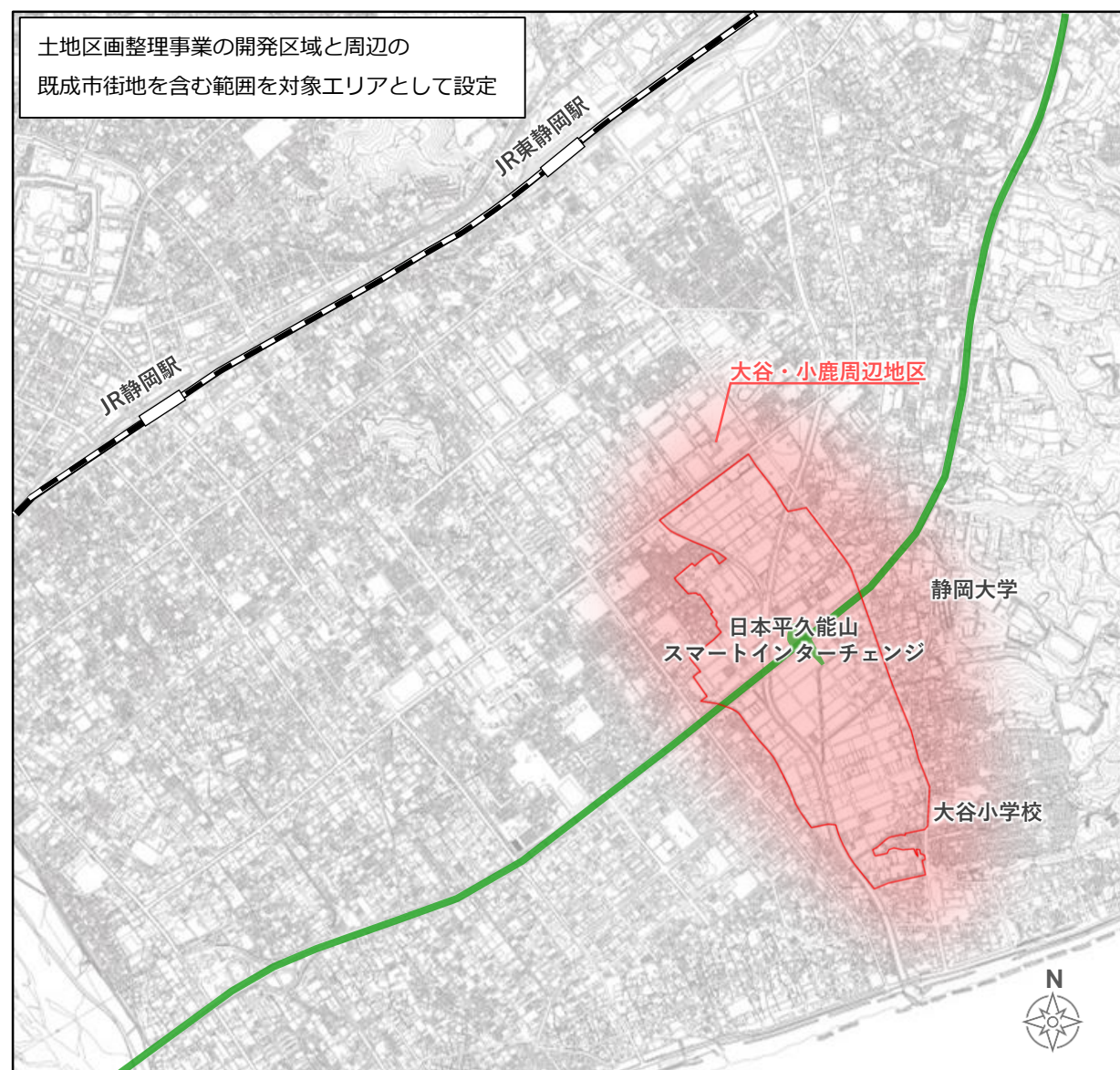


1. はじめに



●大谷・小鹿地区のまちづくり背景

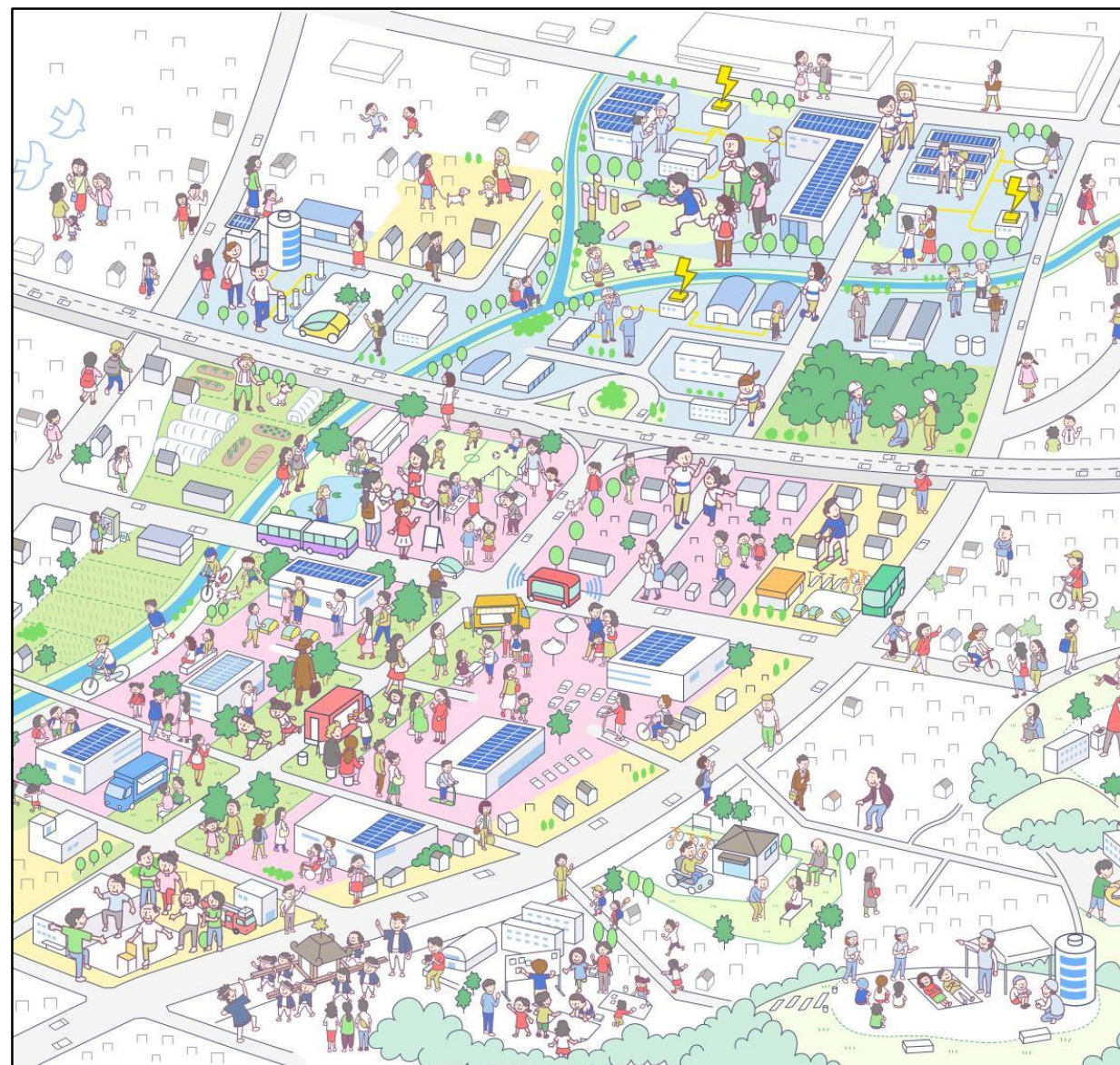
静岡市では、日本平久能山スマートインターチェンジ（2019年～）の供用に向け、2013年3月に「大谷・小鹿地区まちづくりグランドデザイン」（以下、「グランドデザイン」という。）を策定し、大谷・小鹿地区の土地利用の基本方針及び目指すべき導入機能を示しました。現在、グランドデザインに基づき、先行整備地区に位置付けられた「恩田原・片山地区」及び「宮川・水上地区」は、組合施行による土地区画整理事業が進められています。



土地区画整理事業による開発区域

●「大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン」とは

「大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン」は、グランドデザインで示されたハード整備の方針に加え、持続可能なまちづくりに向けて、土地区画整理事業完了後のまちづくりの主体や具体的な取組方針といったソフト面の取組を検討し、エリアに関わる多様な人々が同じ方向を見てまちづくりを進められるように、目指すべきまちの姿や方針等を示すものです。また、“6. まちづくりの取組目標（P7～）”では、目指すべきまちの姿の実現に向けた具体的な取組例を記載しています。



大谷・小鹿周辺地区 イメージパース



2. 「大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン」及び「大谷・小鹿地区まちづくり検討会議」の位置付け



【上位計画】 ※市が策定

静岡市
都市計画
マスター
プラン

静岡市
スマート
シティ
ビジョン

駿河
まなびのま
ちづくり
グランドデ
ザイン

【「大谷・小鹿地区のまちづくり」にかかる計画】

大谷・小鹿地区まちづくり グランドデザイン

ハード

- 区画整理区域内
- 土地利用の基本方針と、目指すべき導入機能を定める

目指すべきまちの姿

「活発に交流し、価値を創り合う創造型産業のまち」
～永きに渡り続く、自ら創るまちづくり～

土地利用の基本方針

目指すべき導入機能



※静岡市策定

恩田原・片山地区(32.8ha)
整備計画図(案)
(H31.2工事着手)



宮川・水上地区(47.1ha)
整備計画図(案)



※グランドデザインで示すハード(土地利用、道路・公園等の都市基盤施設導入機能等)を踏まえて検討

※ソフトで「目指すべきまちの姿」の実現に貢献

大谷・小鹿周辺地区まちづくり ビジョン

ソフト

- 区画整理区域内及びその周辺
- まちづくりにおける活動やサービスなどの取り組みを示す

※「大谷・小鹿地区まちづくり検討会議」策定



策定

大谷・小鹿地区まちづくり検討会議 (産学官民で組織するエリアプラットフォーム)

- 地区のまちづくりビジョン及び地区課題の解消に向けた取組目標を策定

《検討事項》

- 当地区のまちづくりの方向性やあるべき姿に関する事
- 当地区の課題に関する事
- 当地区の課題解決に向けた具体的な手法に関する事

(大谷・小鹿地区まちづくり検討会議設置要綱)



3. 目指すべきまちの姿とまちづくり方針

検討会議では、モビリティ、エネルギー、ウェルネス、コミュニティの4つの柱と1つの共通分野のセーフティについて、地区の特性や課題を抽出し（参考資料）SWOT分析を行い、目指すべきまちの姿及びまちづくり方針を設定しました。

目指すべきまちの姿

「ひとがつながり、ゆたかな暮らしが続くまち」

大谷・小鹿周辺地区では、日本平久能山スマートインターチェンジの供用開始に伴う土地区画整理事業が行われています。今後、新しい技術の導入や環境整備が進み、多くの人々が訪れることで、多様な人々による様々な活動が行われていきます。既存の地域と新たな開発区域が互いを受け入れ、ひとがつながり、活動がつながり、地域がつながることで、住む人・働く人・訪れる人・学ぶ人などを含むすべての人が持続的にゆたかな暮らしを実現し、ウェルビーイングなまちの形成につながっていきます。

まちづくり方針



だれもが行きたい場所に移動でき、次世代の乗り物・サービスで移動がわくわくするまちづくり

歩行・自転車・公共交通・次世代の新たなモビリティなど多様な移動手段の有効活用により、移動の選択肢を増やし、自家用車に頼らない誰もが行きたい場所に移動できるまちを目指します。



健康増進・環境配慮につながるだれもが健幸になるまちづくり

産学官民が連携して誰もが健康になれる環境や仕掛けづくりをし、健康増進意識を高めます。運動や外出をすることによる交流から、心と体の健康を育み、ゆたかな暮らしの実現を目指します。



エリアの価値を高めるエネルギーを創り、かしこく使うまちづくり

脱炭素社会の実現に向け、エリア内の電力の自給自足や他施設等への電力融通について検討を進めます。またエネルギー消費を減らす取組として、個人単位での活動や新たな緑の確保等を推進します。エネルギーをエリア内で考える事でエリアの価値を高めます。



地域資源を活かした、顔の見える未来のコミュニティづくり

エリアの歴史的・人的資源を活かし、住む人、働く人、訪れる人、学ぶ人などを含む多様な人々との連携を図ります。多様なコミュニティづくりが、未来の持続可能なまちづくりへと繋がります。

セーフティ

横断的な取組による相乗効果

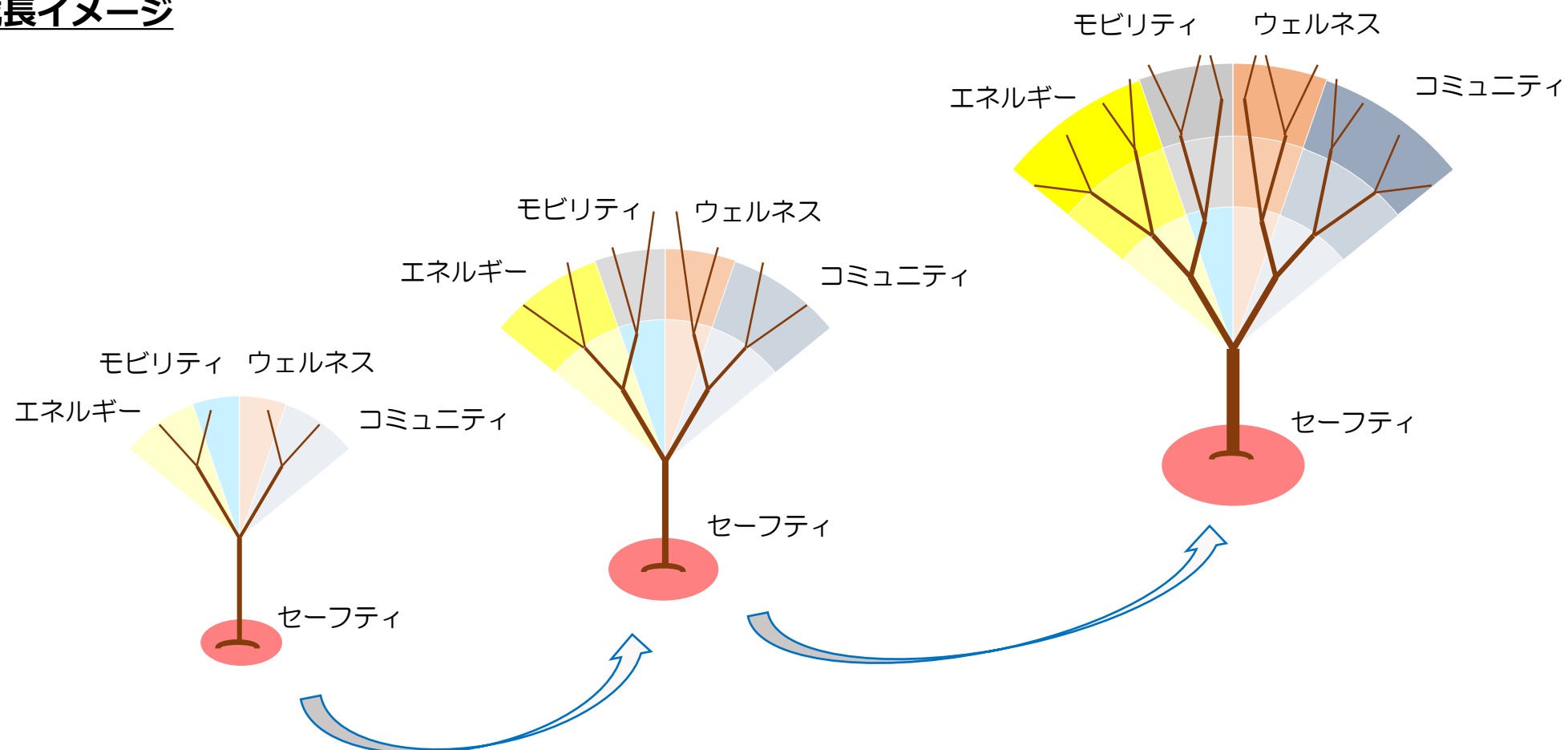
4つの個々の取組みが複数の取組を横断的・総合的に行うことで、相乗効果をもたらします。



4. 成長の道筋



●成長イメージ



●Step.1「発見・開始」

4つのまちづくり方針と1つの共通分野に沿った“**主体的な活動**”を、社会のニーズに合わせて少しずつ始め、自走に向けた支援をしていきます。

●Step.2「拡大・充実」

取り組みに共感する人を増やし、活動を拡大していくために、それぞれの活動を地域全体で支援しながら、“**内容の充実や広がり**”を誘導します。

●Step.3「成熟・自立」

Step1.2で取り組んだ活動が“**自立**”し、さらには、新たな活動が生まれることで、“**分野別の活動の成長**”と“**エリア全体の成長**”につなげます。



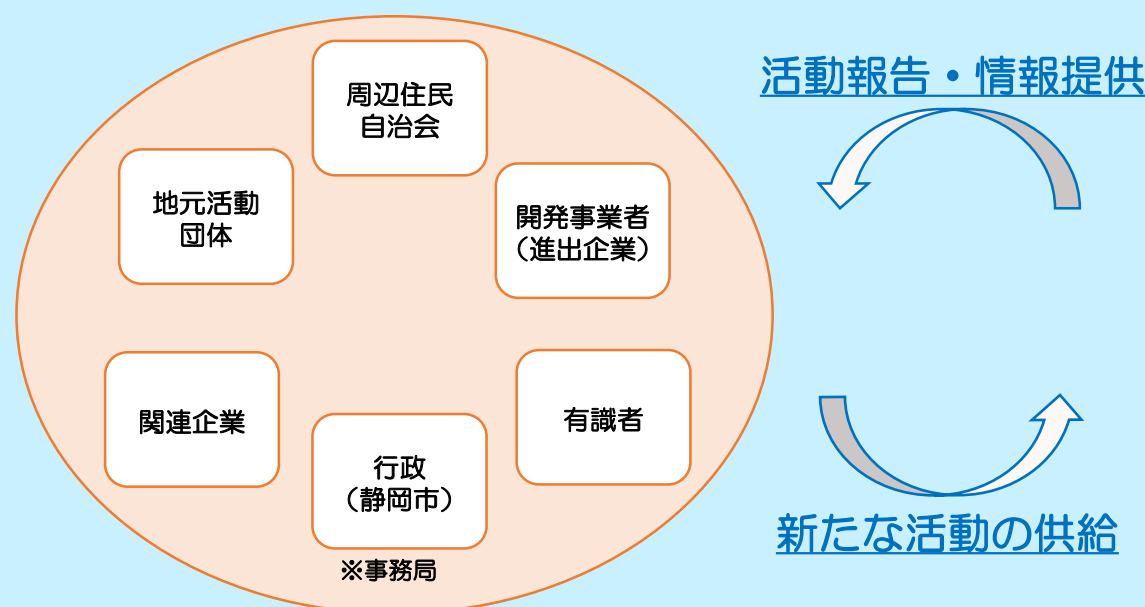
5. 推進体制



●令和7年度～

大谷・小鹿周辺地区エリアマネジメント・チーム

- 「大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン」（令和6年度策定）を踏まえた“ソフト活動の活発化”と“エリアマネジメントの実行”のための体制とします。
- ソフト施策の実行を担う「大谷・小鹿周辺地区まちづくり活動組織」と、自由な参加で情報共有の場となり、新たな活動の供給を担う「大谷・小鹿周辺地区まちづくり未来会議」*の連携を図ります。
- 活動団体等の主体的な活動の原動力を引き出しつつ、エリアの成長等に繋げるための、“緩やかな連携”と“エリマネ組織によるマネジメント”を実施します。

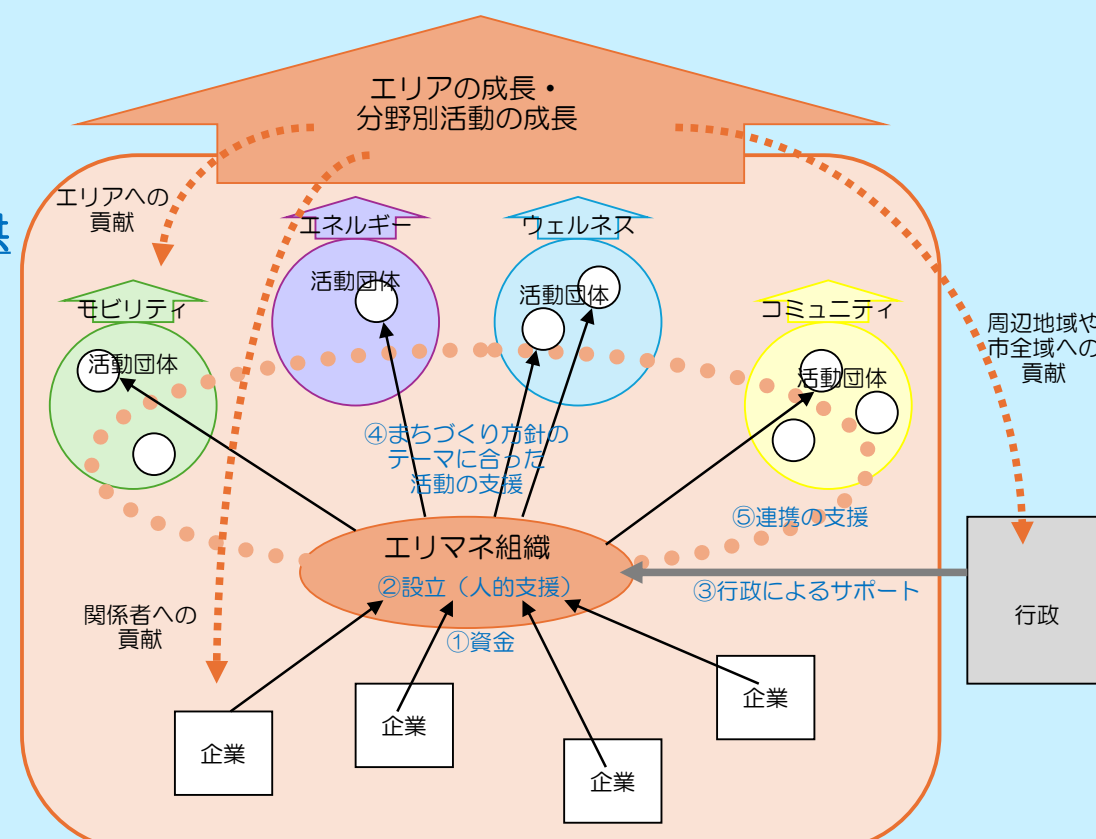


「大谷・小鹿周辺地区まちづくり未来会議(旧:検討会議)」
(将来的なエリアプラットフォーム)

※「大谷・小鹿周辺地区まちづくり未来会議」について

「大谷・小鹿周辺地区まちづくりビジョン」の策定のために立ち上げた「大谷・小鹿周辺地区まちづくり検討会議」は、一旦解消し、「大谷・小鹿周辺地区まちづくり未来会議」として再構成します。

特定の人だけを集めるのではなく、当地区のまちづくりに積極的に関わる意志のある人の参加を募ります。



「大谷・小鹿周辺地区まちづくり活動組織」



6. まちづくりの取組目標



だれもが行きたい場所に移動でき、
次世代の乗り物・サービスで
移動がわくわくするまちづくり

1. エリア内で多様な移動手段を利用できる環境づくり（エリア内移動）

- 1-① ラストワンマイル移動のためのきめ細かな交通サービスの導入
(取組例：デマンド交通、シェアリング型移動サービス、
パーソナルモビリティの導入等)
- 1-② 多様な移動手段を利用できる拠点づくり
(取組例：多様な交通サービス等の乗降箇所を集約したモビリティハブ
(小さな交通結節点・地域拠点) の形成等)
- 1-③ 交通サービスの連携に向けたデータの利活用

2. エリア内と都市拠点を結ぶ快適な移動手段を利用できる環境づくり(エリア内外)

- 2-① 高齢者や子育て世代等が安全に移動できる幹線的な交通サービスの導入
(取組例：車いす・ベビーカー等に対応した低床車両の幹線バス等)
- 2-② 働く人・訪れる人・学ぶ人が快適に利用できる交通サービスの導入
(取組例：周遊バス、送迎バス、連節バス、自転車利用サービス等)
- 2-③ 交通サービスの連携に向けたデータの利活用

3. 次世代モビリティの積極的な導入検討（次世代モビリティ）

- 3-① 少子高齢化時代に対応した先進的な自動運転技術の導入
(取組例：自動運転バス等)
- 3-② 人材不足に対応した物流サービスの導入
(取組例：自動搬送ロボット・ドローンの活用等)
- 3-③ 交通サービスの連携に向けたデータの利活用

4. 災害時にも利用できる移動環境の整備（セーフティ）

- 4-① 災害時における移動・避難のためのモビリティの確保
(取組例：余剰電力を活用した電動小型モビリティ等の導入、自転車の活用等)
- 4-② 災害時においても物資やエネルギー等を輸送できるモビリティの活用
(取組例：非常用電源としての電動小型モビリティ等への活用、ドローン等による
物資輸送等)

※取組例については、例示列举したものであり事業実施を限定するものではない（以下同じ）

■取組イメージ

1-②多様な移動手段を利用できる拠点づくり
ーモビリティハブ



渋谷SMILEモビリティハブ

2-②快適に利用できる交通サービスの導入
ー連節バス



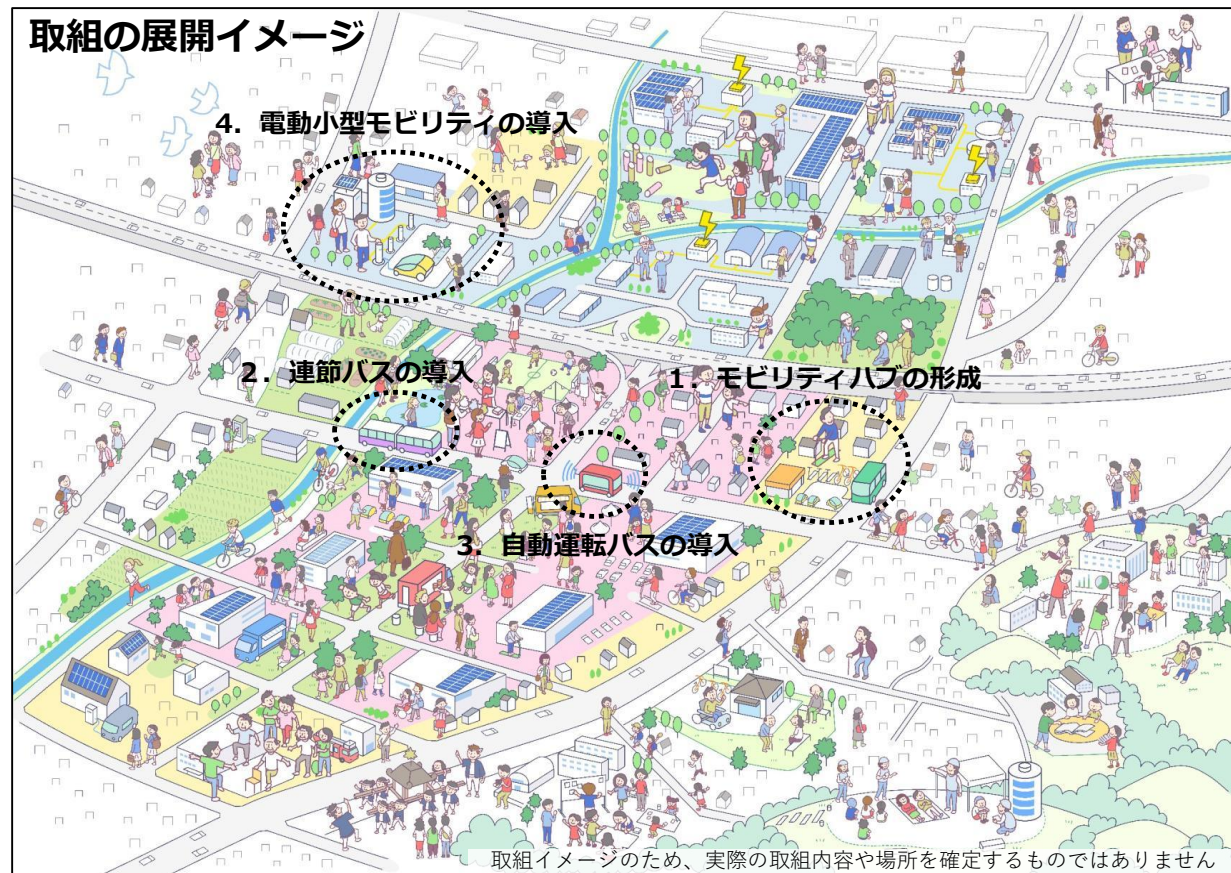
東急バス(株)の連節バス

3-②物流サービスの導入
ー自動搬送ロボット



自動搬送ロボット
(出典：三菱電機(株)より提供)

取組の展開イメージ



1. モビリティハブの形成による多様な移動手段を利用できる拠点づくり（エリア内の多様な移動手段）



2. 連節バスによる幹線的な交通サービスの導入（エリア内外を結ぶ快適な移動手段）



3. 自動運転技術の導入（次世代モビリティの積極的な導入）



4. 電動小型モビリティ等の導入（災害時にも利用できる移動環境の整備）





6. まちづくりの取組目標



エリアの価値を高めるエネルギーを創り、
かしこく使うまちづくり

1. エリアでエネルギーを創る（創エネ）

- 1-① 施設を活用したクリーンエネルギーの創出
(取組例：地区特性を活かした太陽光発電 等)
- 1-② 地域資源を活用したクリーンエネルギーの創出
(取組例：水素発電、バイオマス発電 等)

2. エリアでエネルギーをかしこく使う（省エネ・エネマネ）

- 2-① エリア内のエネルギーの融通
(取組例：施設間・地域間・分野間でのエネルギー融通、電動小型モビリティ等への利用、自営線の設置 等)
- 2-② エネルギー効率の良い建物の推奨
(取組例：ZEB・ZEH等の省エネルギー住宅・建築の導入 等)
- 2-③ 脱炭素ライフスタイルの構築
(取組例：公共交通や電気自動車など環境負荷の低い生活行動の推進、省エネ行動を意識づけるエネルギーの見える化、省エネ・節電行動に係るイベントの開催、省エネガイドラインの作成 等)

3. ゆたかな自然環境形成と連動した温室効果ガスの吸収源確保（吸収源）

- 3-① 緑の形成・維持によるグリーンカーボンの取組
(取組例：街路樹等の植樹・維持、公共空間や民地を含めたグリーンネットワーク、生物多様性確保のためのエコロジカルネットワークの創出 等)
- 3-② 水辺環境の形成・維持によるブルーカーボンの取組
(取組例：河川や貯水池等における自然河岸・湿地の形成・確保 等)

4. 災害に対応した自律的なインフラづくり（セーフティ）

- 4-① 個々の建物や避難所等におけるクリーンエネルギー発電設備の整備
- 4-② 避難所等における蓄電施設や非常電源の整備

■取組イメージ

1-①施設を活用したクリーンエネルギーの創出
一地区特性を活かした太陽光発電



恩田場・片山地区の太陽光パネル

3-①グリーンカーボンの取組
一公共空間等のグリーンネットワーク



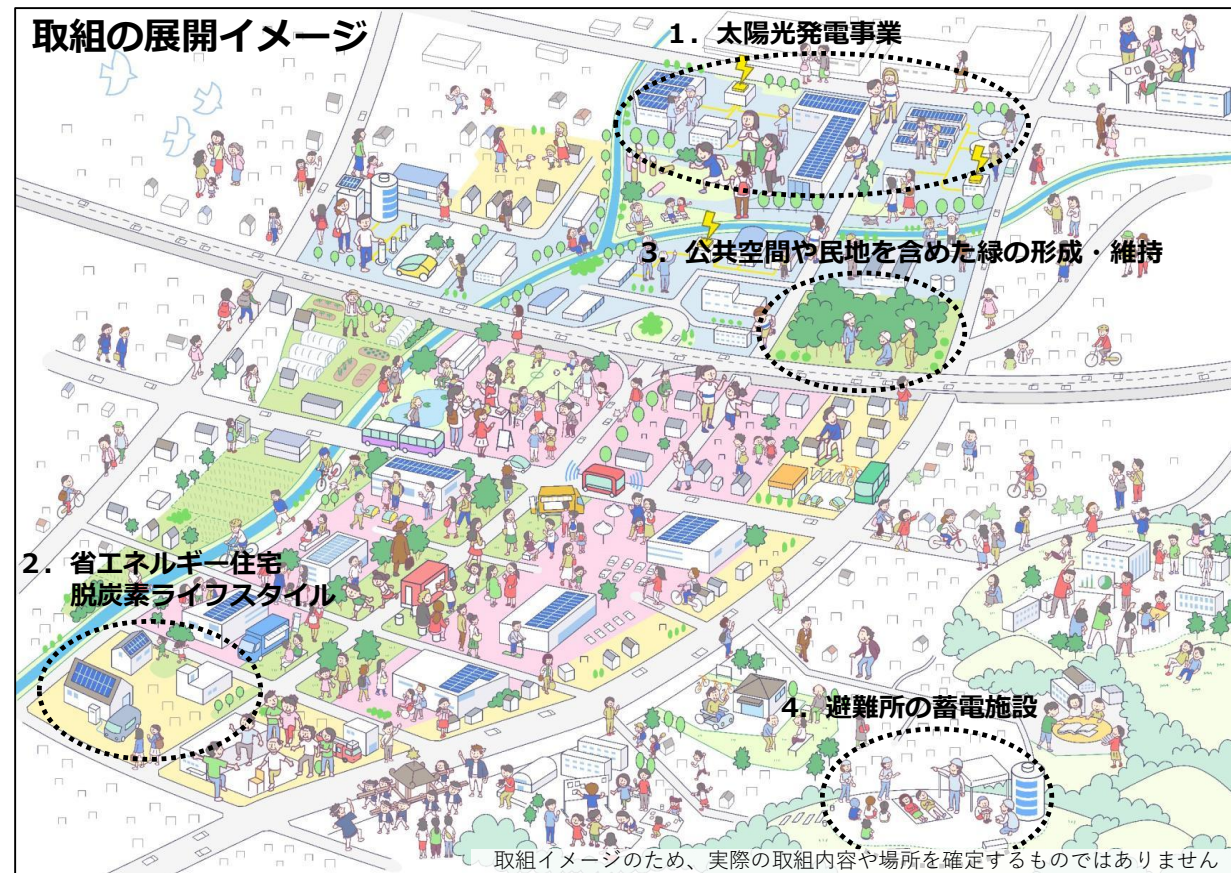
街路樹等による温室効果ガス吸収源の確保

4-②避難所等における蓄電池設備の設置
一静岡市エネルギーの地産地消事業

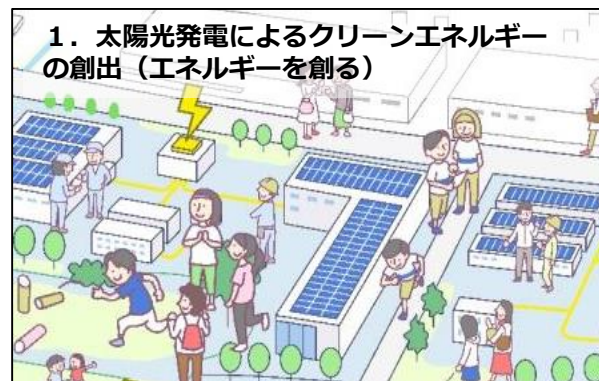


蓄電施設（大谷小学校）

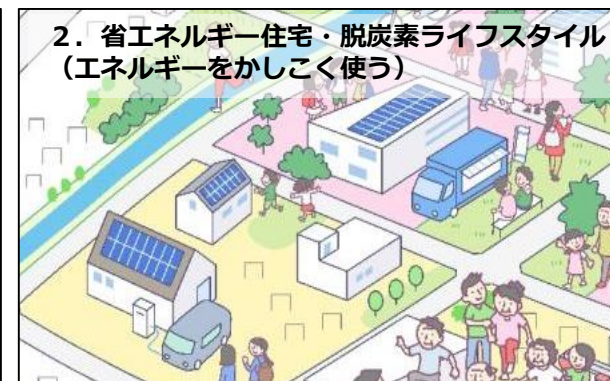
取組の展開イメージ



1. 太陽光発電によるクリーンエネルギーの創出（エネルギーを創る）



2. 省エネルギー住宅・脱炭素ライフスタイル（エネルギーをかしこく使う）



3. 公共空間や民地を含めた緑の形成・維持（温室効果ガス吸収源の確保）



4. 避難所の蓄電施設（災害時に対応した自律的なインフラづくり）





6. まちづくりの取組目標



健康増進・環境配慮につながる だれもが健幸になるまちづくり

1. だれもが健幸になる環境づくり

- 1-① 安全・安心に運動や移動が行える環境整備
(取組例：快適な歩行空間や自転車走行空間の整備、休憩場所の設置 等)
- 1-② 外出したくなる景観や目的地の形成
(取組例：歩いていて心地よい街並みの形成、目的地となる魅力的な空間整備 等)

2. だれもが健幸になる仕掛けづくり

- 2-① 運動するきっかけづくり
(取組例：身体活動に関するインセンティブ付与、ウォーキングマップ等を作成し情報発信、自転車利用サービスの充実 等)
- 2-② 自ずと歩いてしまう仕組みづくり
(取組例：モビリティ分野と連携した公共交通の充実による歩行中心のライフスタイルの構築 等)

3. 健康維持や運動に関する機会・意識づくり

- 3-① 健康イベントの開催・運営
(取組例：スポーツ・ウォーキングイベントの開催、食や交流を目的とした健康イベントの実施 等)
- 3-② 健康に関する知識の習得
(取組例：地域住民を対象とした健康講座の開催 等)

4. 医療・福祉・防災活動との積極的な連携（セーフティ）

- 4-① 医療機関・福祉施設との連携
(取組例：病気の予防に関する取組実施、社会福祉協議会と連携した取組 等)
- 4-② 防災活動との連携
(取組例：地域見守り隊の実施、ハザードマップとウォーキングの連携、避難施設の日常利用 等)

■ 取組イメージ

1-②外出したく景観や目的地の形成
ー安心・安全な歩行空間



東京都 丸の内仲通り
(出典：国土交通省 HP)

2-④運動するきっかけづくり
ーウォーキングマップの作成

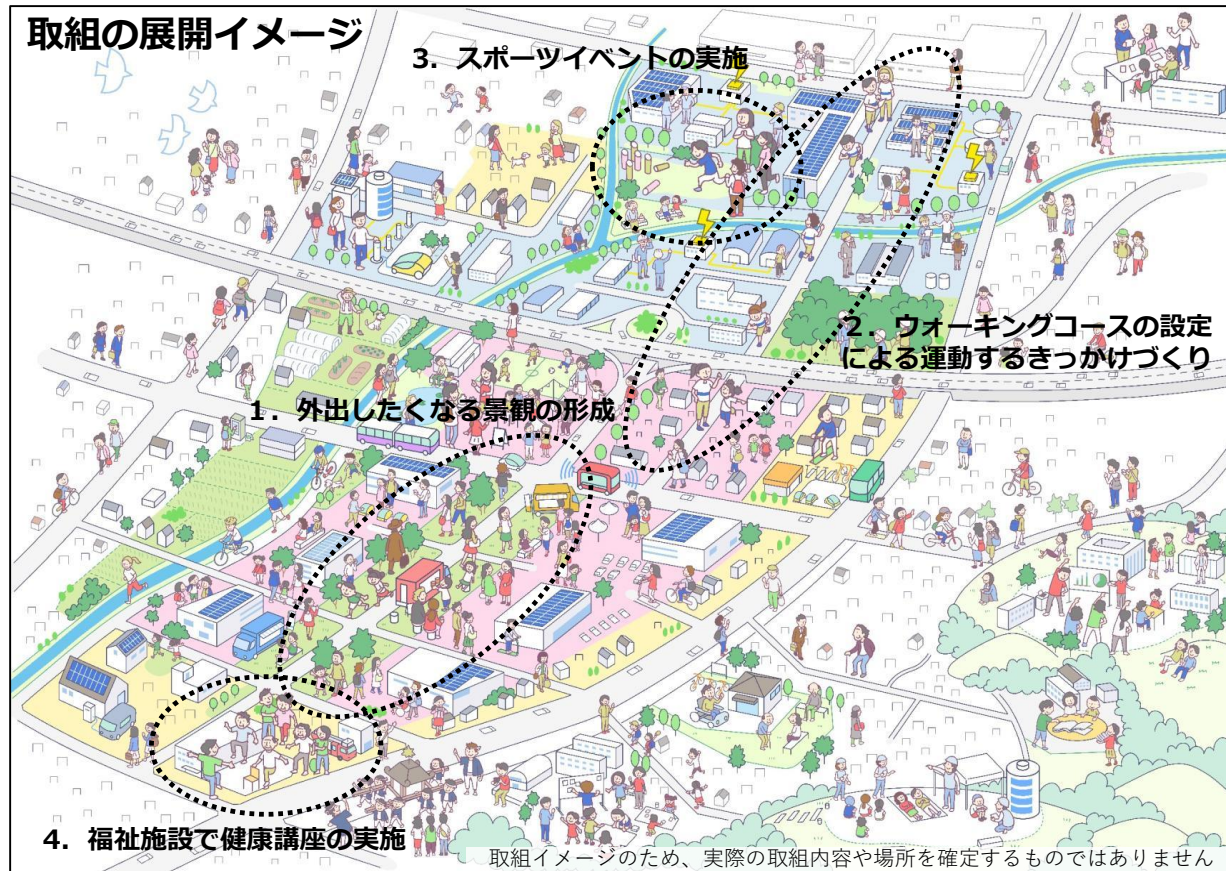


オモウマ健康ウォーキングin大谷・久能

3-①健康イベントの開催・運営
ースポーツイベント（公共空間活用）



恩田原グローバルスポーツイベント





6. まちづくりの取組目標



地域資源を活かした、顔の見える未来のコミュニティづくり

1. 多様な交流が生まれるプラットフォームづくり

- 1-① まちづくりに係る多様な活動を行うプラットフォームの設置・運営
(取組例：エリアプラットフォームの運営・機能強化、活動を企画・実行する分科会の設置、みんなのチャレンジ基地ICLa等)
- 1-② 地域の歴史・文化の継承
(取組例：新旧世代の交流機会創出、地域資源を活用した体験学習やワークショップの開催、地域のお祭りの継承等)

2. 多様な交流のための拠点・場づくり

- 2-① 多様な人々が集まることができる交流空間の設置・運営
(取組例：誰もが使える開かれた居場所づくり、会議やイベントを行う空間の確保、情報発信や共有のための場づくり、公民館等の有効活用等)
- 2-② まちのシンボル・ランドマークの形成
(取組例：地域の愛着を醸成するデザインされた建築、公共空間・公園等のモニュメント、目印となるシンボルツリーの育成等)

3. 多様な交流のための機会づくり

- 3-① 地域の人々による交流機会づくり
(取組例：多様な人材が交流するイベント開催、ウェルネス分野と連携したイベント開催等)
- 3-② 新たな人々との交流機会づくり
(取組例：地域住民と開発エリアで新たに働く人や来訪する人との交流、地域と大学生の交流、企業と連携したインターンシップの実施等)

4. 防災活動や社会情勢等の変化への対応（セーフティ）

- 4-① 地域防災の強化
(取組例：日常的な孤立化を防ぎ災害時にも助け合える体制づくり、コミュニティフリッジの実施等)
- 4-② 社会情勢等の変化への対応
(取組例：コワーキングスペースの創出等)

■取組イメージ

1-①プラットフォームづくり
ーみんなのチャレンジ基地ICLa



みんなのチャレンジ基地ICLa
(出典：ESUNE HP)

1-②地域の歴史・文化の継承
ー地域のお祭りの継承



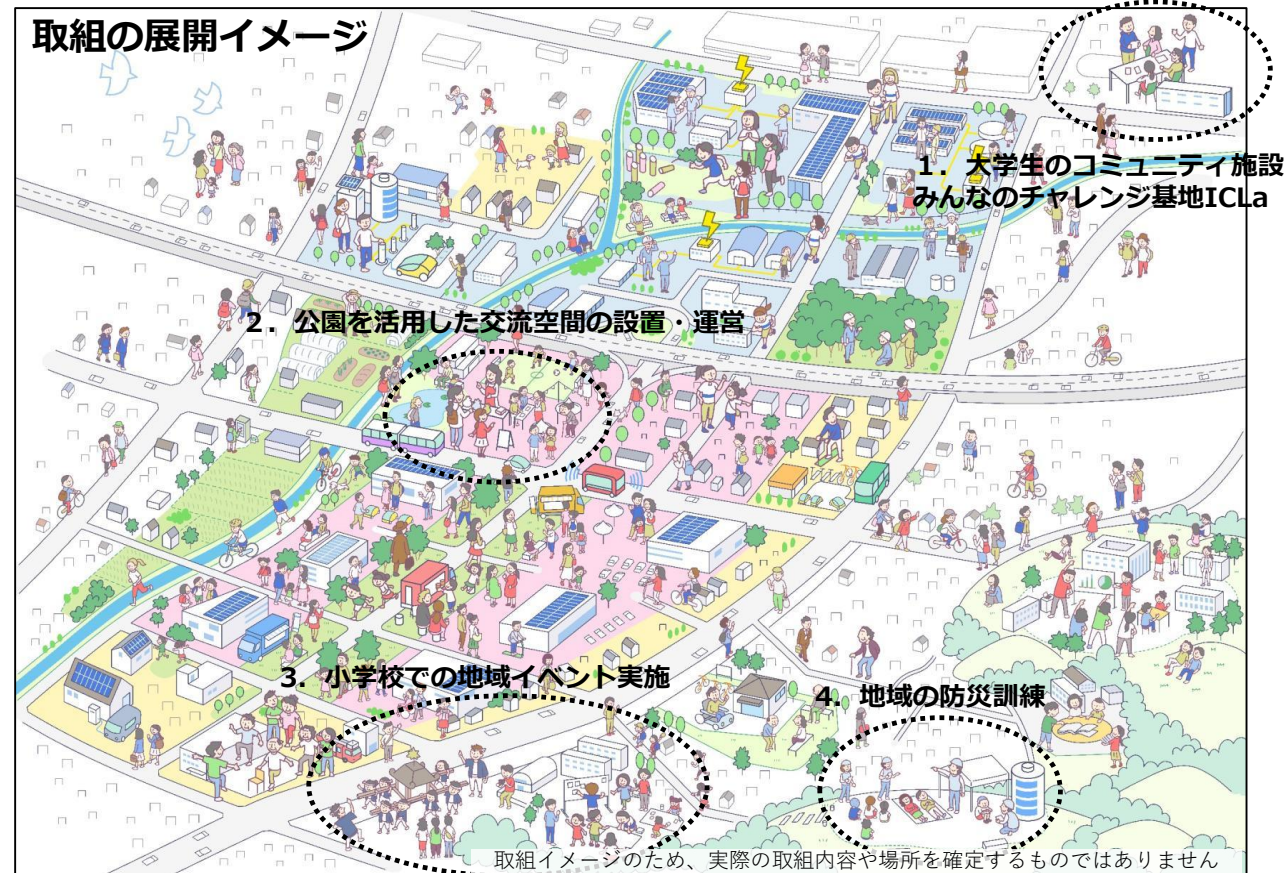
大谷夏祭り

3-①地域の人々による交流機会づくり
ー多様な人材が交流するイベント開催



バンビーン・プロジェクト

取組の展開イメージ



1. みんなのチャレンジ基地ICLa等のコミュニティ施設等の設置・運営（多様な交流が生まれるプラットフォームづくり）



2. 公園を活用した多様な人々が集まることができる交流空間の設置・運営（多様な交流のための拠点・場づくり）



3. 小学校での地域イベントによる地域住民の交流機会づくり（多様な交流のための機会づくり）



4. 地域の防災訓練による地域防災の強化（防災活動や社会情勢等の変化への対応）



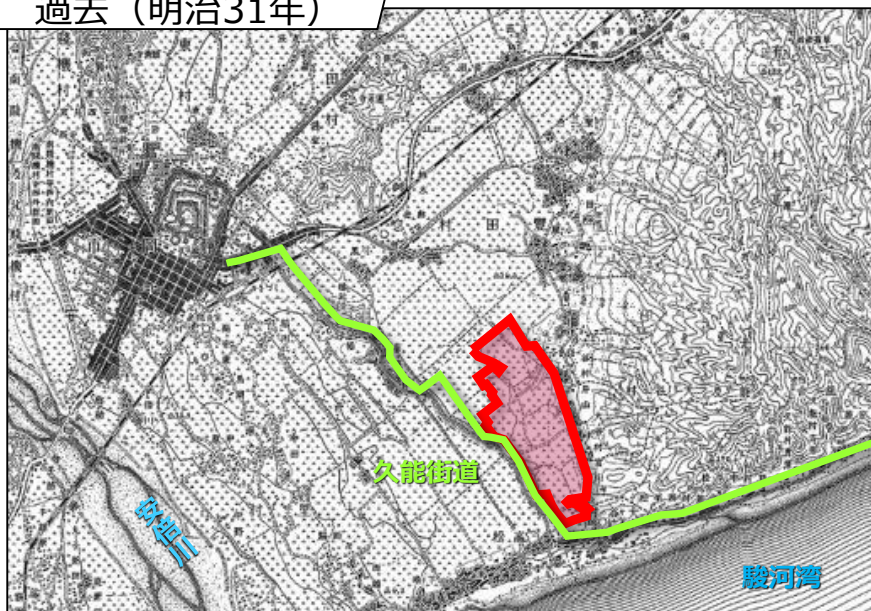


7. 参考資料（大谷・小鹿周辺地区の特性①）

（１）地区の成り立ち

まちづくりを考える上で、まちの歴史を知り活かしていくことはとても重要です。ここでは、大谷・小鹿周辺地区（以下、当地区）を過去・現在・将来に分け、その変遷をたどることで、当地区の成り立ちを確認していきます。

過去（明治31年）



当地区は、駿府城から久能山東照宮へと続く久能街道に面し、明治31年の古地図を参照すると土地の大半が田畑として活用されていたことが分かります。戦争拡大に備えた昭和6年に、住友金属工業(株)静岡プロペラ製作所の広大な用地確保が始まり、昭和18年の三菱、住友両工場の軍事工場化などによって、当地区の周辺（主に恩田原・片山地区周辺）は、工業系の土地利用がされていくようになりました。また、昭和41年から始まった耕地整理によって田畑の区画が整理され、開発区域内（赤枠内）が市街化調整区域になりました。さらに、昭和42年に静岡大学が大岩地区から当地区に移転したことを契機に、当地区の丘陵地では大規模な宅地造成が進むなど、周辺の都市的土地利用が進みました。

現在



昭和後期から大谷土地区画整理事業及び高松土地区画整理事業等が施行され、周辺地域では住宅系の土地利用が図られました。また都市計画道路（下大谷線）の一部が整備され、今後、当地区の交通の大動脈として機能することが期待されており、道路の拡幅や延伸などの整備が進められています。

また、令和元年9月に、静岡市の新たな玄関口として「東名高速道路日本平久能山スマートインターチェンジ」が開通したことや、市内に残された数少ないまとまった非都市的平坦地であることから、当地区は静岡市全体の発展につながる大きな可能性を有しています。

将来



スマートインターチェンジの供用開始により市街化圧力が高まり、無秩序な開発が進む可能性があるため、大谷・小鹿地区まちづくりグランドデザインに基づき土地区画整理事業が進められています。このグランドデザインで策定された土地利用の基本方針を基に、交流施設エリア、居住エリア、工業・物流エリア、農業エリアの4つに分かれ、開発が進んでいきます。

先行整備地区である恩田原・片山地区は令和8年度、宮川・水上地区は令和18年度に事業完了予定です。

今後、事業の進捗に伴い開発が進むことで、新しい技術の導入や環境整備が進み、多くの人々が訪れ、様々な活動が行われていくことが想定されます。

凡例	
	交流施設エリア
	居住エリア
	工業・物流エリア
	農業エリア

出典：大谷誌、大谷の里、静岡市の区画整理、大谷・小鹿地区まちづくりグランドデザインを参考に作成

7. 参考資料（大谷・小鹿周辺地区の特性②）

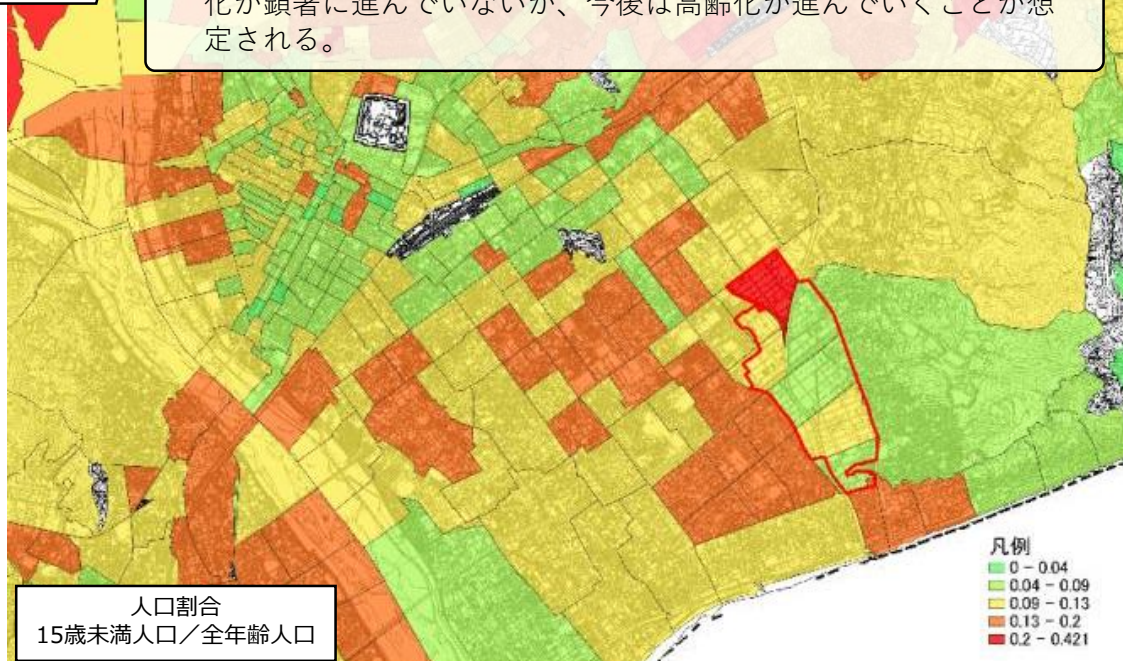


（２）地区の特性

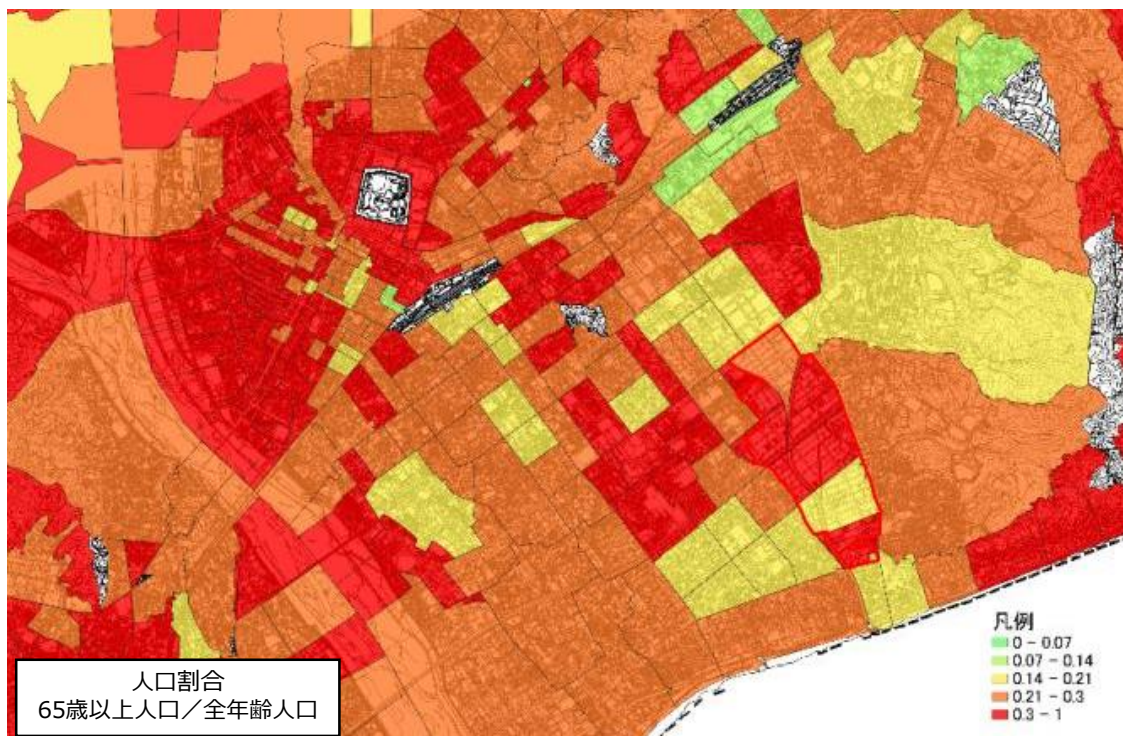
地区の特性（強み・弱み） 大谷・小鹿周辺地区について、人口動向・土地利用、都市交通等を基に、地区の位置づけや特性を整理しました。

人口

- 地区周辺において、南側や西側は年少人口率が高く、現在は高齢化が顕著に進んでいないが、今後は高齢化が進んでいくことが想定される。



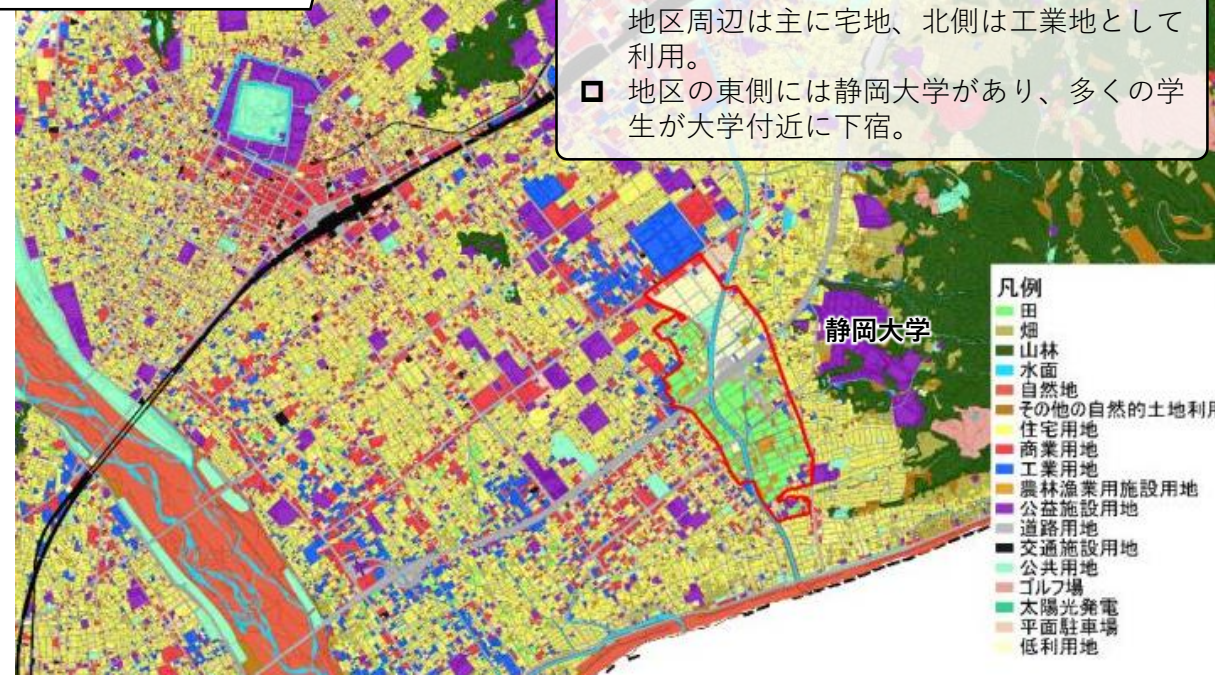
出典：国勢調査（令和2年）



出典：国勢調査（令和2年）

現在の土地利用

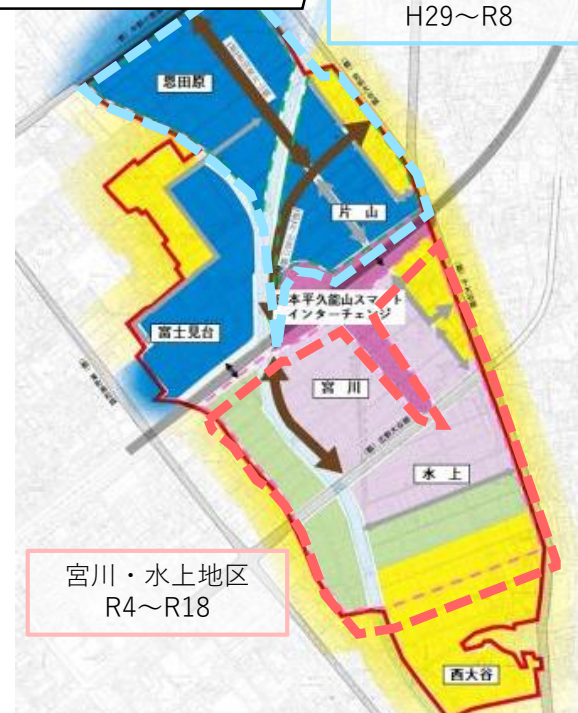
- 現在の土地利用として地区内は農地利用、地区周辺は主に宅地、北側は工業地として利用。
- 地区の東側には静岡大学があり、多くの学生が大学付近に下宿。



出典：都市計画基礎調査

将来の土地利用

恩田原・片山地区
H29～R8



- H25.3に大谷・小鹿地区まちづくりグランドデザインで左図の土地利用が示され、土地地区画事業が進む。
- 開発区域内では、SICによる交通利便性を活かした開発が進み、東名北側は周辺の土地利用と連担して工業・物流エリア、東名南側は市内外の交流を目的とした交流施設エリアや農業エリアとして開発が進む。

凡例	
交流施設エリア	
居住エリア	
工業・物流エリア	
農業エリア	

目指すべき導入機能



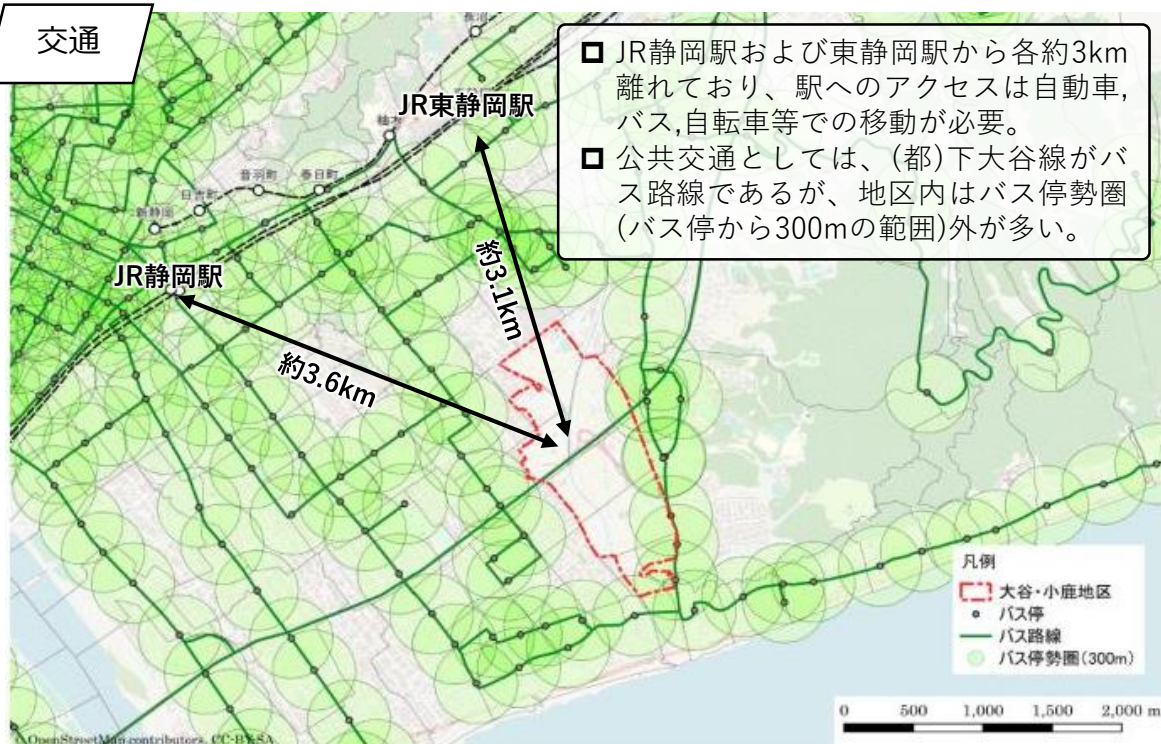
出典：大谷・小鹿地区まちづくりグランドデザイン

7. 参考資料（大谷・小鹿周辺地区の特性③）



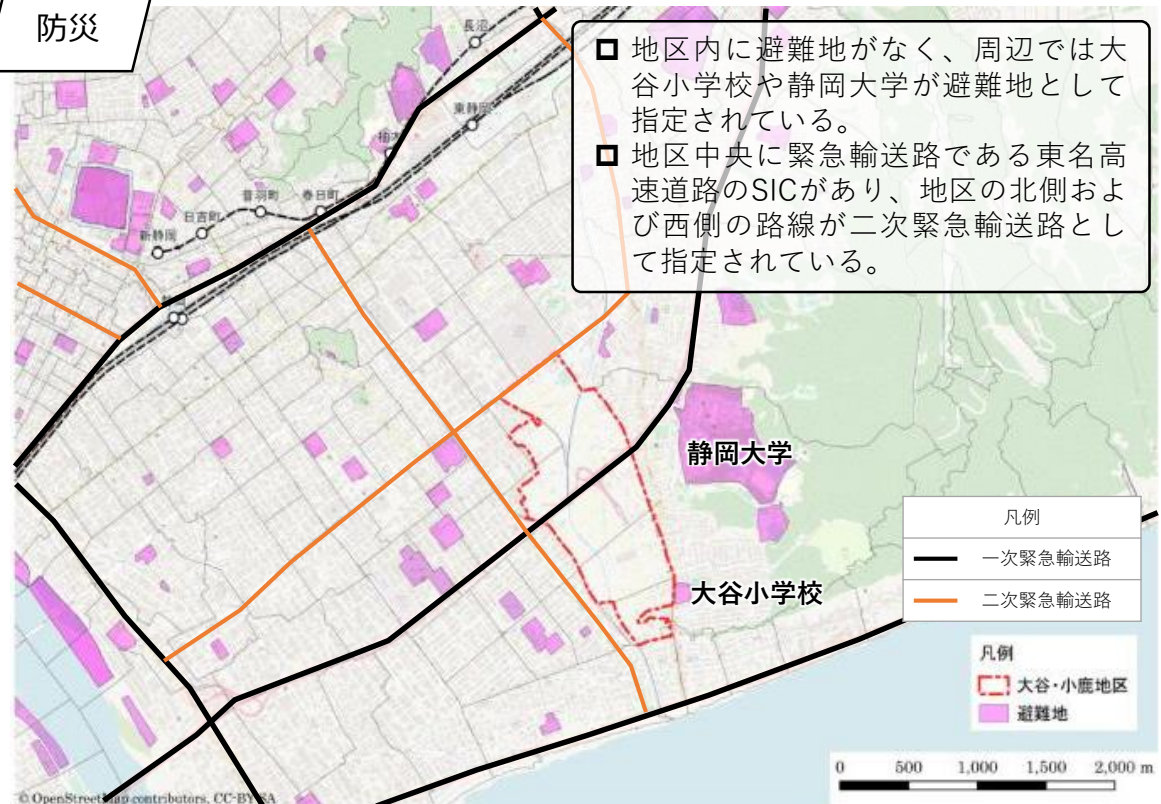
（２）地区の特性

交通



出典：第4回静岡中部都市圏パーソントリップ調査（平成24年-26年）におけるバス停データを基に作成

防災



出典：都市計画基礎調査（平成27年）、静岡県GIS（みんなのハザードマップ）

（３）社会的背景

社会的背景（機会・脅威）

地区の課題を考える上で、今後の社会的課題・動向を考慮した検討を行う必要があります。ここでは、特に意識すべき社会的課題・動向として、以下の4つを整理しました。

①SDGsの推進

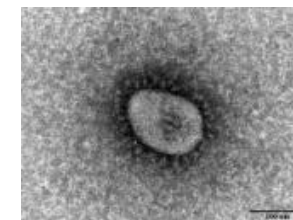
- 持続的なまちづくりを進めるためには、SDGsの視点を取り入れていくことが重要です。
- SDGsとは2030年を期限とする社会全体の普遍的な国際目標で、「誰一人取り残さない」持続可能な社会を実現するための17のゴールと169のターゲットから構成されています。



出典：外務省HP SDGs17の目標

②ポストコロナ時代への移行

- 新型コロナウイルス感染症は、人々のライフスタイル、ビジネススタイルを大きく変える契機となっています。
- 当地区においても、ゆとりある空間の使い方や非接触型のシステムの構築など、感染症対策を意識したまちづくりを進めていくことが求められています。



出典：国立感染症研究所HP
新型コロナウイルス

③デジタル技術の進展

- 新型コロナウイルスの感染拡大以降、社会におけるデジタル技術の進展が加速しており、また、国は2021年9月にデジタル庁を発足させるなど、早急な対策を進めています。
- 当地区においても、デジタル技術を活用したまちづくりを進めていくことが重要です。



出典：デジタル庁HP
デジタル田園都市国家構想の
取組イメージ全体像

④脱炭素社会の実現に向けた取組の加速

- 静岡市は2020年12月に2050年の温室効果ガス排出実質ゼロに向けて取り組んでいくことを静岡市議会において表明しました。
- 当地区では、恩田原・片山地区が「脱炭素先行地域」に指定されるなど、他の地区に先んじて脱炭素の取組を推進していくことが求められています。



出典：環境省HP
脱炭素のイメージ



7. 参考資料（大谷・小鹿周辺地区の課題①）

まちづくりの方向性や将来ビジョンを策定するにあたり、前頁の地区の特性や社会的背景を踏まえながら、モビリティ、エネルギー、ウェルネス、コミュニティの4つの分野に分けた整理を行いました。



モビリティ（快適な移動環境）

WSでのご意見			解決すべき課題
分類		主なご意見	
ア	移動環境 (歩行者,自転車)	・道路に歩道がなく、歩きにくい ・道路が狭い ・歩行者のための安全な道路 ・自転車等との分離 ・移動しやすい歩道の整備	1. 移動の安全性・快適性向上 (歩行者・自転車) ・歩行者・自転車にとって移動しやすい空間の整備 ・歩道の広さ、平坦性など
	移動手段 (近距離移動)	・スマートIC付近のモビリティポートを検討（次世代交通の実証） ・買い物が不便	2. 近距離移動の利便性向上 ・住民の近隣移動や来訪者の地区内移動の手段確保
ウ	移動手段 (公共交通・多様な交通)	・バス路線の見直し ・コミュニティバスがあるけど、高齢者には不便・アクセスしにくい ・静岡駅周辺への交通手段 →高齢者が利用しやすい交通手段 ・交通が静岡駅に過度に集中 ・静岡駅まで時間がかかる ・電車へのアクセス方法が限定的 ・移動手段が車に限られている ・時間にとられない公共交通 ・乗り合いタクシー等がほしい ・高齢者にも乗りやすい乗り物 ・多様な交通手段が欲しい	3. 公共交通の利便性向上 ・鉄道、バス、タクシー等、既存の公共交通の利便性向上 4. 多様な移動手段の効果的な活用 ・既存の移動手段を組み合わせ活用 ・移動手段の多様化への対応
	移動手段 (自動車)	・家庭における2台目の車の利用 ・高齢化が進み車の運転に不安 →運転免許証返納 ・自動運転に対応した道路が必要	5. 自動車利用の適正化 ・過度な自動車利用を避け、自動車利用を適正化する 6. 自動運転技術への対応 ・自動運転技術に対応した道路、施設の整備
オ	移動ニーズの把握	・地域住民の目的地が不明 ・地区の特色がわからない ・ハード整備と共にソフト施策も検討が必要	7. 地区周辺移動の把握 ・交通系情報基盤（既存データ）を活用した移動ニーズの把握、データ活用
カ	物流	・物流における運搬人材不足 ・移動販売があると便利	8. 物流の効率化 ・新たな物流システムの構築 ・移動販売等、地区内物流の集約化



エネルギー（クリーン×安心）

WSでのご意見			解決すべき課題
分類		主なご意見	
ア	脱炭素	・脱炭素は大きな課題で、脱炭素に取り組む先進モデルになれると良い ・大谷・小鹿地区が“クリーンなまち”のリーダーシップをとれるような「提案型」のまちづくりをしてほしい	1. 脱炭素社会実現への取組 ・脱炭素を先行的に取り組む地区としての発信、意識共有 ・脱炭素社会実現に向けて、他都市のモデルとなるような先進的な取組を行う
	既存資源の有効活用	・緑地（農地を含む）の維持、管理 ・農業や自然環境と掛け合わされた省エネ、クリーンエネルギーを有効活用できないか？ ・治水対策の大谷川は深さもあり、何か活用方法を検討	2. 既存の自然資源の保全・活用 ・既存の緑地や農地等の保全 ・既存の河川、農産物等を活用した取組み ・クリーンエネルギーの活用等
ウ	エネルギーの効率化 ・有効利用	・電力が余るところがあれば必要とところに供給する ・自給できること→分配できること ・電力不足が続いている →まちとしてエネルギーを創る ・太陽光発電と蓄電は必要 ・地域住民へ供給する仕組み ・外部に依存しない自立した仕組み ・恩田原片山地区の取組との連携	3. 地区内での電力の自給自足 ・地区で自立した効率的なエネルギーシステムの構築 ・恩田原・片山地区の取組の水平展開等
	安心・安全	・災害対応 ・津波への対応 ・ライフラインの整備が断片的	4. 災害対応力の強化 ・災害に備えた設備やシステム構築 ・強靱なライフラインの整備 ・余剰電力の災害時利用
オ	電気、エネルギーへの意識	・電気料金高騰に対する対策 ・電気が高い、電気不足 ・夏や冬の各戸のエネルギー利用を抑えることが必要 ・生活者(従業員,住民)の意識改革が必要 ・エネルギー問題との向合い方、事業性	5. 個人単位での電力消費の低減(省エネ) ・個人での消費電力抑制 ・省エネ意識の醸成
カ	自動車依存からの脱却 ×モビリティ	・SICがあり、自動車の走行が多いのでは（排気ガスの問題） ・自動車に頼らず移動する環境づくり ・シェアサイクルのさらなる周知	6. 自動車以外の移動手段の充実 ・過度に自動車に依存しない移動環境整備 ・エネルギー融通によるモビリティとの連携 ・環境負荷の低減へと繋げる



7. 参考資料（大谷・小鹿周辺地区の課題②）



ウェルネス（健康長寿の促進）

WSでのご意見			解決すべき課題
分類		主なご意見	
ア	歩行空間 ×モビリティ	・段差や坂が多いと外出を控えてしまう ・歩行空間や自転車走行空間が整備されていない ・自転車走行レーンが整備されているが道路幅員が広がっていないため、走行しにくい ・河川敷の再整備（ウォーキングコース、サイクリングコース） ・交通量が多く、暗い道も多い	1. 移動の安全性・快適性向上（歩行者・自転車） ・歩行者・自転車にとって移動しやすい空間の整備 ・歩道の広さ、平坦性などの確保 ※「モビリティ」と共通
イ	歩く仕掛け（ソフト）	・ウォーキングコースやマップがない ・歩くコースがわからない ・歩く×食、歩く×美の組み合わせ ・歩くとポイントが貯まるアプリ入れてから「あともう少し歩こう」が増えた	2. 歩き、健康維持の動機づくり ・歩く、走る、スポーツ等を促す仕掛けをつくる ・歩行促進ツール（ウォーキングコース、マップ、アプリ）の作成、展開
ウ	歩く仕掛け（目的地）	・ウォーキングのみを主目的としないコースの整備 ・商店街との連携 ・気軽に行けるフィットネスジムや温浴施設 ・海岸沿い（R150沿）の道の周囲のにぎわい作りにより「歩こう」と思わせる街づくりをする	3. 目的地となる魅力あるまちづくり ・魅力的な公共空間の整備や施設の誘致 ・景観への配慮 ・充実したサービス提供のための運営体制の構築
エ	マインド	・歩くことが健康に繋がるということは知っているが、歩くきっかけがない ・ひとりだと歩かない ・健康に対する意識が低い ・夏暑くて冬寒いので、歩ける時期が少ない ・リモートで歩かなくなった ・整体で歩き方教えてもらい、歩くのが楽しくなった。	4. 歩き、健康に関する意識・意欲向上 ・歩き、健康に関する意識、意欲や知識の向上を図り、個人での運動習慣構築に取り組む ・歩き、健康に関する学びの機会をつくる
オ	歩きによる交流 ×コミュニティ	・ウォーキング中すれ違うときに会話やあいさつがあると楽しい。 ・地域交流会の実施 ・高齢者や一人暮らし向けの取組	5. 歩き、健康維持を通じた交流拡大 ・個々人の健康維持のため、地区単位での取り組み ・健康活動団体をつくり、交流を図る
カ	医療	（関連する意見なし）	6. 医療・福祉との連携 ・医療機関や福祉機関と連携し、病気を予防 ・医療へのアクセス性向上等



コミュニティ（暮らしの充実）

WSでのご意見			解決すべき課題
分類	主なご意見		
ア	空間・場所	・だれもがふらっと寄れる、長居したいと思えるような拠点が欲しい ・知ったり気付いたことを伝え合う場づくり ・たまり場・居場所 ・地域のひとと転入者が気軽に集える場 ・行ってみたら誰かが居る ・拠点（シンボル）や自治会事務所など	1. 交流拠点となる場の創出 ・交流拠点となる物理的な場所、空間の確保 ・既存の建物、公共空間
イ	交流・連携のためのプラットフォーム（組織、手段）	・ソーシャルファシリテーターの育成 ・顔の見える関係性の構築 ・安心できるルールが定められている ・まちづくりより地域づくり ・自治会と学生の交流 ・新しく来た人がどう考えているのか ・若い人の力を借りたい ・500人の中1/4が高齢者→交流が大事 ・子どもをまんなかに据えて考える ・「農」を通じた関係づくり	2. 交流プラットフォームの構築 ・まちづくり関係者の意見、情報交換を行う会議体 ・まちづくりを主体的に担う組織の形成 3. 多様な主体の交流機会の創出（日常） ・住民、来訪者、学生、企業、子どもなどの多様な主体が日常的に交流を持てる機会や場所の確保
ウ	イベント	・コロナでイベントが終わってしまった ・様々な人が集まるイベント →おまつりや避難訓練 ・農業祭の実施→まつりの開催で人を集める ・まず知り合うこと →特に若者と地域住民、運動会の開催 ・公民館を改築し拠点としてイベント開催	4. 多様な主体の交流機会の創出（イベント） ・交流の最たる機会となるイベントの定期的な開催による賑わい創出
エ	地域資源	・昔からの行事を大切にし、体験してもらう ・人が減り祭りがなくなるため継承が大事 ・大谷人ならではの村・学・寺を大事に ・大谷人を知る ・地域の良さを知り、気づくためのまち歩き ・地域資源を大事にしてネットワーク化 ・オリジナリティ（大谷・小鹿の人、行事）を再発見＆意味の共創	5. 地域資源の有効活用・継承 ・歴史、文化、伝統、祭事、行事や史跡、寺など、地区が有する資源を改めて理解し、発信、継承 6. 新たな地域資源の発掘 ・新たな地域資源となる地区独自の魅力発掘
オ	安心・安全	・災害時に助け合い 高齢者×学生×世帯 ・コミュニティフリッジ	7.安全・便利・快適な生活環境の実現 ・互いに助け合い、地区全体で暮らしの質を高める
カ	新しい価値観・暮らし	・震災やコロナをチャンスと捉える ・シェアリングエコノミー	8.新しい日常への適応 ・コロナ禍、デジタル化等による暮らしの変化への対応

